

愛知・朝日西遺跡

あさひにし

1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町

2 調査期間 一九八四年(昭五九)七月～一九八五年三月

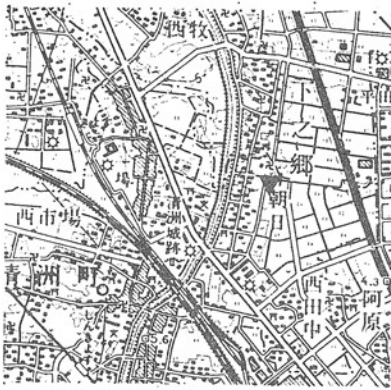
3 発掘機関 財愛知県教育サービスセンター

4 調査担当者 遠藤才文・金原 宏・佐藤公保・小沢一弘・丹羽 博・服部哲也

5 遺跡の種類 城郭・都市跡

6 遺跡の年代 鎌倉～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

朝日西遺跡は、五条川東岸の自然堤防上に展開する中世～近世の

複合遺跡であり、中世末の清洲城下町のなかでは、内堀と外堀の間に位置する。

発掘調査は、名古屋環状

二号線建設に伴い、昭和五十六年以降進められ今年度で終了する予定である。

五九年度調査区は、清洲城下町のうち町人地区に比

定される地区(E～G区)と寺社地が推定される地区(A～D区)に大別できるが、木簡類の出土したSD一三(A・B区)、SD一一(D区)は、ともに寺社地区にあたる。

SD一三は、南北方向からほぼ直角に東へ折れ曲がる溝であり、幅5m～6m、深さ30cm～220cmを測る。溝中からは、多数の土器類の他、漆塗り椀、下駄、石製五輪塔・宝篋印塔の各部分などを発見した。五輪卒塔婆(①)⑤は、溝が方向を変える地点の下層粘土中から、一九本が重なり合う状態で出土した。また、卒塔婆以外の文字資料として、「南無阿弥陀仏」と墨書された木簡、「文禄二年」(二五九三年)の年号が記された施釉陶器(黄瀬戸)椀がある。

SD一一は、南北方向に走る溝であり、幅約7m、深さ約90cmを測る。下層粘質土中からは土師器を中心とした土器類の他、多種多様の木製品(箸・折敷・杓子・曲物類・漆塗り椀等々)、さらには人骨(頭骨で四体分)、多量の獣骨類が出土した。木簡類はこれら遺物群に混在する状況で発見され、位牌と考えられるもの(⑥)⑩の他、柿経の断簡、文書木簡らしいものがある。

これら木簡類の出土した二つの溝の年代は、卒塔婆(慶長三・四年、一五九八・九年)、墨書土器(文禄二年、一五九三年)の紀年銘資料から、或いは共伴遺物の年代観によって、清洲城下町が最も繁栄した一六世紀末～一七世紀初頭に考えられる。

8 木簡の積文・内容

